

大学生の「不本意入学」と学生生活：目的意識の獲得に着目して

岸, 康太
筑波大学人間学類教育学類・学類性

<https://doi.org/10.15017/6788265>

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 25, pp.81-96, 2023-03-15. Seminar of Educational Sociology Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studies Kyushu University

バージョン：

権利関係：

大学生の「不本意入学」と学生生活 —目的意識の獲得に着目して—

The student life of university students who are “unwilling attenders”
-from the viewpoint of gaining a sense of purpose-

岸 康太

1. はじめに

「不本意入学」という語は、一般に「第一志望の大学に入学することができなかつた者」として認識されることが多い。

2022年にリクルート進学総研が実施した「高校生の進路選択に関する調査（進研センサス）」によると、2022年4月に入学した学生の68.3%が第一志望の大学に入学しており、前回の2019年の調査より14.8ポイント増加している。この結果から、自身の希望する大学へと入学する学生が多くなり、不本意入学者が減少したと判断することも可能であるかもしれない。

しかしながら、「第一志望の大学に入学した」学生を、「不本意感を持たずに入学した」と判断することは軽率ではないか。例えば、国立大学の場合、一次試験の自己採点を受けて第一志望校を変更する場合もある。また、志望順位以前に、大学に入学すること自体が不本意な学生も存在する。つまり、実際には「不本意入学者」は志望順位を問わずに存在するのである。そして、彼らの不本意感を大学生活においていかに低減させていくかということこそが、今日の大学において重要な視点ではないか。

文部科学省が公開した、令和3年度「学生就業状況（中退者・休学者等）に関する調査」から、大学において約1.95%の学生が中退をしていることが明らかになった。さらに、中退の理由のうち15.7%が「学校生活不適応・就学意欲低下」となっている。この中の一定数が、目的意識の喪失による不本意入学が理由となっていることも予想できるのではないか。雨森（2006：

112）は「不本意入学の場合、退学や休学などのように学修に支障をきたしやすいということは、大学関係者なら経験的にも感覚的にも理解できると思われる」と分析するほか、山田（2006：35）は「大学入学直後の学生に対し、不本意入学であるかどうか、実際に始まった大学生活のどこに不満感・違和感を持っているかなどを明らかにしていくことは、大学側にとって取り組むのにかなり抵抗のある課題であろう」とした上で、「しかし、こうした問題に真剣に向き合い、学生の不適応感の構造を明らかにしていくことが、学生の大学生活への満足感を高める方策を探る重要な手段であることは間違いない」と紹介している。このことから分かるように、不本意感を抱いた学生に焦点を当てることにより、多様な学生を受け入れる今日の大学における課題と、今後への方向性を見つける一助となるのではないか。

実際、「不本意入学」という語は、教育社会学者のマーチン・トロウ（Martin Trow）（1978：28-37）が、大学の大量化に伴って大学入学に対する自明性と強制性が付与され、目的意識が剥奪されることによって生じると指摘したことに始まる。つまり、トロウの分析に従うと、第一志望の大学へと入学した学生であっても、大学進学への動機づけが周囲の環境による部分が大きく、ゆえに大学への明確な目的意識が得られない状態で入学した場合、「不本意入学」と判断されることになる。

そのように考えると、上記の定義における「不本意入学者」にとっては、大学入学後における「目的意識」の獲得の有無が、不本意感の低減に影響を与えるとい

う仮説が導き出せる。入学する大学に対して不本意感を抱いていた学生が、大学入学後において目的意識を獲得した場合、「不本意感」は低減したと判断できるのではないか。では、大学入学後に目的意識を獲得した学生は、いかなる過程を経て不本意感を低減させることができたのであろうか。

本稿の目的は、大学入学時点において、自身の進学する大学に対して満足していない、いわゆる「不本意入学者」が、大学生活を通して自身の不本意感を低減させた場合、そこにはどのような目的意識の獲得過程があるのかを迫る点にある。本稿ではまず、大学進学時における学問面への目的意識の程度によって、不本意感の低減過程が異なることを明らかにする。そして、学問面への目的意識が高い学生は、進学先の学部が不本意であっても学問面への目的意識を持ち続けるのに対し、入学前における目的意識が明確でない学生は、学問面以外の要素が不本意感の低減に大きな影響を与えていることを論証する。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では、先行研究の検討により、本稿の位置づけを示す。第3節では、研究方法を説明する。第4節では、大学入学後に不本意感を低減させた学生を対象にインタビューを行い、大学生活に対していかなる目的意識を獲得したのか、そこにはどのような過程が存在するのかについて調査を行う。そして、第5節では考察と今後の課題を述べる。

2. 先行研究の検討

2.1. 不本意入学の定義

「不本意入学」と一概にいつても、その定義は様々である。大隅ほか(2013)、神林(2014)をはじめとする研究からは、不本意入学者を、「第一志望の大学へと入学することが叶わなかった学生」と定義していることがうかがえる。

その一方で、不本意入学を単に第一志望の大学への入学が叶わなかった学生に限定する事に対して否定的な考えを持つ研究も存在する。山田(2009:58)は、「従来であれば第1志望か否かという指標は、ある程

度満足度と関連していたが、志望度と満足度が直接つながらない学生も増えてきている」と近年の特徴を分析している。また、雨森(2006:112)は、「受験生の多くは、第1志望の大学であるかどうかよりも緩やかな水準で志望校を検討していると考えられる」とし、第一志望でなくても、「行きたい大学」へと入学した学生は不本意入学と定義せず、「行きたくない大学」へと入学した学生を「不本意入学」と定義すべきであると主張している。このような研究からは、志望順位と不本意感を安易に直結させることへの批判が読み取れる。

また、大学へと進学すること自体への不本意感にも注目した研究も存在する。竹内正興(2020:5)は「高等教育のユニバーサル段階において、『不本意入学』は入学する特定の大学に対しての不本意感、『不本意就学』は入学する特定の大学ではなく、高校卒業後の進路先が大学進学となったことによる不本意というそれぞれ異なる概念として整理できることが考えられる」としている。つまり「不本意入学」と「不本意就学」を、大学に入学すること自体が不本意か否かで区別している点で注目に値する研究である。ここで注目すべきなのは、「不本意入学」と「不本意就学」の違いである。竹内正興(2022:69)は両者の区別について「学校に入ることは同じであっても、『就学』が入る学校を特定していないのに対し、『入学』は入る大学を特定した意味合いが強いということである。つまり、『入学』と『就学』は学校に入るという意味では同じだが、入学する学校を特定化しているのかどうかによってそれぞれ異なる概念を持っていると考えられる」と説明している。また、望月(2007:10-11)が『『不本意入学者』とは、大学に進学すること自体に不本意感を抱くのではなく、自己が進学した大学に対して不本意感を抱いている者であり、マス高等教育からユニバーサル高等教育への移行に伴って出てくる場所の『不本意就学』の問題とは意味合いが異なる」としていることから、ユニバーサル段階の高等教育へと変容したことにより、大学へ入学すること自体に不本意感を抱く「不本意就学者」が注目されるようになったのである。

このように、いかなる要素に起因して不本意感を抱

いているのかという点は、学生によって多様であることが想像される。ゆえに、不本意入学を明確に定義づけることは難しい。そのような中で、不本意入学の類型化を試みたものとして、小林（2000）の研究が挙げられる。小林は、不本意入学に関して「不本意入学というのは本人の気持ちと関係する」としたうえで、第一志望不合格型、合格可能性だけを重視して「受かる大学」に入学した合格優先型、自分の興味・適正よりも資格取得など就職の有利さを優先した就職優先型、「自宅から通学できる」「学費が安い」など経済的・地理的事情が優先された家庭の事情型の4つの型に分類した。

小林が大学入学時のみに着目したのに対し、大学決定時と入学後の満足度に着目し、不本意入学を類型化した研究も存在する。伊藤（1995）は『「不本意感」は状況により変化の可能性があるという点から、受験の失敗による入学時の不本意感と、入学後の大学生活への幻滅による不本意感（期待外れ）とを組み合わせることにより、不本意感の変化パターンの分類を試みた。そして、「第一志望で入学したものについては、希望大学に入学しそのまま不本意感とは無縁な大学生活を送る“満足群”と、第一志望の大学に入学しながらも現実のキャンパスライフに失望し不本意感を募らせる“がっかり群”に分けられた。次に他大学志望者については、不本意な入学ではあったが、今では現状を受容し満足している“受容群”と、希望しない大学にしかならず入学し慢性化した不本意感を抱き続ける“不満群”とに分類」した。

本稿の目的は、大学入学後に不本意感を低減させた学生を対象とし、いかなる過程を経たのかを明らかにすることである。よって、今回は伊藤（1995）の研究、さらには分類における「受容群」に着目する。大学入学時において不本意感を抱いていた場合において、入学後にその不本意感を低減させた点は、本稿の研究対象と一致する。伊藤は、「受容群」について以下のように述べている。

「大学進学に際しては“人間的成長”という、より高次な期待を持つものが過半数を占め、享乐的・

功利的思考は低い。また受験校の選択にあたっては、学部や学科という内容を重視している。また、第一志望ではなかったにも関わらず、『しかたなく』入学したと認知している者は少数で、その点、主体的で積極的な進路決定を行ったものが多いと考えられる。入学後の、周りの学生に対する印象も好意的で、頭に描いていた大学生のイメージとのずれも比較的小さい。しかも、これらの大学生像に対する違和感（自己像とのずれ）も小さく、充実感が高い。」

伊藤の研究では、大学入学時・大学入学後の調査時点での特徴が分析されている。しかし、大学入学時からのプロセスには焦点が置かれていない。本稿では、入学時点と不本意感を解消させた時点をつなぐ期間に着目したいと考える。次節では、社会の変化が今日における不本意入学者とどのような関連があるかを概観する。

2.2.社会の変化と不本意入学

マーチン・トロウは高等教育の全体規模（当該年齢人口に占める大学在籍率）の変化から15%までをエリート型、15%～50%をマス型、50%以上をユニバーサル型の三つに分類した。そして、「学生数の増加とユニバーサル高等教育への移行は、多くの学生に大学への就学を次第に義務と感じさせるようになり、彼らはますます“自分の意志からではなく”就学する存在となりつつある」（トロウ 1976：30）と述べる。ユニバーサル段階の高等教育へと変容したことにより、多くの学生に対して高等教育を受ける機会が与えられた。そのため、本来は大学へと進学することに対して消極的な学生が「半強制的」に大学へと入学するようになった点は、前節でのトロウの指摘に見られるように重要な点である。同様に、山田（2006：29）は、「大学への進学率が50%を超え、入学試験方式が多様化するなかで、大学生の学力・パーソナリティも多様化し、もはや大学生は『自主的に学ぶ自立した存在』とはいえないような未成熟性を示す場合も多くなっている」と分析し、大学進学率の増加が学生の主体性低下に導くことを

危惧している。

このように、大学を取り巻く社会の変化は、不本意入学者の増加に影響を及ぼす場合もある。ここまでユニバーサル段階の高等教育と不本意入学の関係性について概観したが、日本の入試制度が不本意入学者を生み出す原因であることも考えられる。伊藤（1995：30）は「不本意就学の問題は、第一に、学歴偏重主義をめぐって競争する他者の存在があって初めて生じる」とした。さらに竹内正興（2020：4）は、「大学入試の場合、もう少し頑張っていればもう少し偏差値が上の大学に進学できたのかもしれないという学部・学科等の序列化された大学ランキングによる焚きつけの構造が、入学しなかったレベルの大学群の選抜から漏れたときに不本意感を発生させる要因となっている可能性が示唆される」として、偏差値による大学の序列化が不本意入学者を生み出していると分析した。

では、大学の序列化を生み出す入試構造とはどのようなものなのか。これを読み解く手がかりとして、中村（2012）の研究が挙げられる。（中村 2012：53）は、日本の入試を「多様化政策」と「統一試験政策」に分類した。「統一試験政策」に関しては、「進学適性検査」（1947～1954）、「能研テスト」（1963～1968）、「共通一次試験」（1979～1989）、「大学入試センター試験」（1990～2020）そして、現在の「大学入試共通テスト」のことを指す。これらについて「戦後の大学入学者選抜制度は、統一試験の導入と失敗を繰り返しつつそれが徐々に普及定着していく歴史でもあった」としており、日本において「統一入試」による影響が根深く残っていることを指摘する。そして「多様化政策」は、一発入試以外の入試方式のことを指す。中村が挙げた「統一試験政策」に関して、竹内（2014：40）は『統一試験政策』中心の大学入試構造が『現在の大学入試センター試験』に対する受験生やステークホルダーへの影響度を高め、誰の目にもわかる明確な序列化を生み出したと考えられる。全国の大学序列化が『統一試験』によって一元化されたのである。しかも『統一試験』は大学序列化だけでなく大学評価基準も一元化し、このことが『不本意入学者』という負の産物を生み出しやすくしてしまったと考えられる」と分析した。

このような入試制度に伴う大学の序列化は、高校段階での進路選択にも大きな影響を及ぼす。竹内（2016）は、進学校出身者と非進学校出身者に着目し、不本意入学の実態を分析した。有名進学校出身者は「有名高校の中に張り巡らされたまなざしの中で、生徒たちは有名高校に入学したからには大学も有名大学（貴種）を目指さなければならないという価値観に縛られ、有名大学に進学できない場合、入学する大学に対して不本意感というメンタリティが発生しやすいことが考えられる」（竹内 2016：19）とした。また、調査から「進学校出身者は非進学校出身者と比べ、第一志望で大学に入学している割合が低く、第二志望以下になると大学不本意入学になりやすいのに対し、非進学校出身者は第二志望以下でも大学入学への本意度が高いメンタリティを持つ割合が高い」（竹内 2012：26）という結果を導き出した。いずれも、偏差値による大学の序列化が、不本意入学者を導き出していることが読み取れる。

さらに、選抜社会の「加熱」と「冷却」を導き出したのは竹内洋（1988）である。竹内は、選抜社会の特徴として「選抜社会への加熱は、多くの人々を希少な地位や財、あるいは学歴に向けての競争にアセクト（欲求）させる。しかるに首尾よくそうした地位や財、あるいは学歴を手にする人はごく少数にしか過ぎない」（竹内 1988：29）と説明する。そして、希望した地位や財、学歴を獲得することができなかった者に対しては、「冷却」を行う必要があると述べる。ここでの「冷却」は「希望やあてにしていたことが実現されなかったことから失望のどん底におちいってしまわないようにして、社会が最大限の努力をとりつける」（竹内 1988：30）過程であると定義づけている。

さらに、「冷却」には「代替的価値に移行し失敗に適応」する「冷却」と、「次善の達成の満足によって失敗に適応」する「縮小」に分類する。同様に、「加熱」に関しても、「選抜社会の支配的な成功経路と異なった成功経路」への「代替的加熱」と「選抜に選ばれなくても意気消沈することなく、再挑戦するよう励ます」ことである「再加熱」に分類した。そして、選拔されなかった者はこれらの類型のどれか、あるいは組み合わせ

わせによって適応が行われると分析した。これを不本意入学者の問題と関連させると、「冷却」に関しては、大学入学後において、新たな目的を見つけ不本意感を低減させることが「冷却」であり、第一志望の大学ではなかったが、第二志望・第三志望に合格したこと自体に満足することで不本意感を低減させる「縮小」とあると説明できる。「加熱」に関しては、入学することになった大学で目的意識を見つける「代替的加熱」と、いわゆる「浪人」をすることにより自らの目標に向けて再挑戦する「再加熱」で説明できる。

このように考えると、竹内洋が指摘した「縮小」さらには「代替的加熱」の原理は、不本意感を持って大学へと入学した学生が、目的意識を獲得してその不本意感を低減させる過程と関連しているのではないかと考えられる。そして、その目的意識の対象は学業に限ったことではないだろう。自身が所属する学部はもちろん、他の学部を幅広く受講する機会も存在する。さらに、サークル活動をはじめとする課外活動、アルバイト、さらには就職活動など、幅広い大学生活を送る。そして、大学生活のどの部分に大きな価値観が存在するかは学生によって多様である。

本稿では幅広い大学生活に焦点を当て、目的意識の獲得過程を追う。そこで次節では、学生と大学生活に焦点を当てた研究について概観する。

2.3. 不本意入学と学生生活

不本意入学者の大学生活について論じた研究としては、鶴田 (2016) の研究が挙げられる。鶴田は、「不本意入学した女子学生 (B 子さん) の事例を提示し、その学生相談過程を具に検討していくことを通して、学生相談における『不本意入学』学生への支援の方法について考察」(鶴田 2016 : 40) した。

上記の鶴田 (2016) の研究のように、大学に対し不本意感を抱いている学生の解決に焦点を当てた研究は見られるものの、不本意感を低減させた学生に対して、学生自身がどのような大学生活を送ることで不本意感を低減させているのかを説明することはできない。また、大学生活と一括りにいっても、さまざまな機会が存在する。つまり、不本意感を低減させる要因

は、大学生活における学業面に限らず幅広く存在するのではないかと考える。

小林 (2000 : 67) は「実際には、不本意感を抱きながらも、クラス・サークル等での友人関係を支えにしたり、その学問に興味を持つことができ、やがて、その不満が解消したりやわらいだりする学生が多い」と考察した。さらに、浜島・谷田川・武内 (2013 : 324) は『『大学生活』にはさまざまな局面があり、『サークル』や『アルバイト』などの活動、人間関係、諸局面での意識・態度と強く関連してくる』として、現状の大学生活の目的の多様化を指摘した上で『『授業』といった大学教育の中心ともいえる活動の重要性はいうまでもないが、それ以上にこうした生活全体に対する満足度、評価の高さが、彼らの大学生活を充実させている』とまとめている。

このように、先行研究からは、今日における大学生は学業面に限らず、大学生活の幅広い機会を利用することで充実感を高めていることが伺える。しかしながら、上記の研究は大学生を一つの枠組みの中で捉えており、不本意入学者と本意入学者、さらには、不本意入学者の中でも大学入学以前からの目的意識の有無による比較はされていない。

次節以降では、入学後に不本意感を低減させた学生を対象とする。彼らの大学生活における目的意識の獲得過程を追うことで、今日における学生の実態を明らかにする。

3. 研究の対象と方法

本稿では、大学入学時に不本意感を抱いていた学生が、いかなる過程を経て大学に対する目的意識を獲得し、不本意感を低減させたのかを明らかにする。よって、学生自身の体験を詳細に聞き出すため、半構造化インタビューを行う。

対象者は大学入学後に不本意感を低減させた不本意入学者である。しかし、学生によってどのような点が不本意であるかは多様であるため、「不本意感」を明確に定義づけることは難しい。そこで本研究では、対象者を「不本意感を抱いていた学生」という表現で募

集した上で、インタビュー調査の際にどのような点に不本意感を抱いていたかを詳細に聞き出す。本研究の焦点は、大学入学前における大学進学への動機づけによって、不本意入学者における目的意識の獲得過程がどのように異なるかである。よって、本稿では竹内正興（2022）を参考に、「不本意入学」を

進学先の大学に対して本意でない（満足していない）入学

と定義づけることとする。

なお、研究の対象者は、関東圏の大学へと入学した学生とした。関東圏には多くの大学が存在しており、学生は様々な大学を比較・検討しながら志望校を決定する。ゆえに、多様な背景を持った学生にアプローチをすることができると考えたからである。さらに、対象学年は現4年次、または卒業生とした。理由は新型コロナウイルス感染症による自粛期間にある。感染症の拡大により我々の生活は制限された。大学においても、授業のリモート化に加え、アルバイトの休止、サークル活動の禁止など、学生生活の多くの機会が失われた。

本稿では学生生活のいかなる要素が不本意感の低減に影響を及ぼしたかを検討する。よって、対象を幅広い要素の大学生活を経験したであろう「感染症拡大以前の大学生活を経験した学生」とした。

対象者は、2022年9月1日から10月17日まで、Google formを用いて募集した。なお、本稿では不本意感を「進路に対して満足していない」と定義し、「進学先決定時は不本意感を抱いていたが、入学後においてその不本意感を低減させた」学生を対象として呼びかけた。Google formの概要欄にも上記の対象を記載し、該当する学生を求めた。結果的に、6名の学生（卒業生）に協力を得た（A-F）。対象者は、インタビューの実施時期の早い順に記した。以下、調査対象者の属性を表1に示す。インタビューは2022年10月下旬に行い、オンライン会議システムZoomを用いて1名当たり40分程度実施した。また、協力者の許可を得たうえで録音を行った。

インタビューの質問に関する論点は主に2点である。1点目は、対象者がいかにして大学進学へのきっかけを得たのか、である。本稿では、対象者の中でも、大学進学自体への動機づけに着目し、

- ・学問分野への明確な目的意識を持ったうえで大学進学を志した学生（＝内発的な動機）

- ・学問への明確な目的意識は持たず、周囲の影響により大学進学を志した学生（＝外発的な動機）

という2つのパターンに分類する。なお、本研究での焦点は後者の、学問への明確な目的意識が存在していない学生に当てられる。

2点目は、大学入学前に目的意識を獲得していない場合、大学生活のいかなる要素に影響を受け、目的意識を獲得したのかを明らかにすることである。学問面・アルバイト・サークル活動などの機会によるものであるのか、指導教員・支援室の職員・友人などの対人関係によるものなのか。学問分野への目的意識を持ったうえで入学した学生との比較とともに明らかにする。

表1 研究協力者

学生	性別	出身大学	学年
A	男性	都内私立大学A	4年次
B	男性	関東圏国立大学B	4年次
C	女性	関東圏国立大学B	4年次
D	男性	都内私立大学C	卒業生
E	男性	都内私立大学D	4年次
F	女性	都内私立大学E	4年次

筆者作成

調査では、不本意感を抱いた背景とその後の過程を詳細に聞き出すため、

- (1)大学入試以前での進路選択について
- (2)進学先決定時の不本意感について
- (3)大学入学後について
- (4)大学生活全体を通しての不本意感の低減についてのテーマを設定して調査を行った。以下、テーマごとに調査の結果を記述する。

望校選択の基準としたようである。

4. 調査の結果

4.1. 大学入試以前での進路選択について

ここでは、大学に進学すること自体に抵抗はなかったか。また、最終的に大学進学を志したきっかけを調査した。大学進学に関心を抱いた動機が、親や友人など他者の影響による、外発的な要因が大きいのか。あるいは、自身の学問興味に基づく内発的なものであるか。上記の点を明らかにすることは、大学入学後における不本意感低減の要因を探る上での、大きな要素であると判断した。加えて、志望校選択においてどのような基準が存在したのかも調査した。

学生 A は、大学進学のきっかけは、周りの影響が大きいと語る。

周りが大学進学をする流れだったから、大学に行かないという選択肢自体がそのころはあまりなかったかと思います。家庭環境的にも学費を払ってくれるくらいの余裕はあったし、そういう意味では(大学に進学すると決定するのは)当たり前であったと思います。

周囲の影響により大学への進学が当然視されるようになり、自然と大学進学を志すようになった。そのように自明視された大学進学において、どのような基準で志望大学を決定させたかを尋ねた。

あまり大学について考えていなくて。でも、将来的に公務員になりたいという希望がありました。なので、公務員就職に有利そうな大学を選んでいました。それで、結局合格した大学の中で、公務員の進学率が一番高くて、将来的に安心かなという感じで選択しました。大学への進学が周りに合わせてという感じだったから、正直勉強したい事とかがあまりなかったです。

大学生活、特に学問面における目的意識は明確でなく、公務員に就職するという目標に適する大学を、志

学生 B も同様に、大学進学自体は周囲の影響が大きいと語る。

生徒というか、学生というか。勉強をする身分みたいな。どうしても、小・中・高・大という流れを意識してしまっていました。高専とかの選択肢もあったのかもしれないですけど、当時は全く考えていませんでした。当時は、ぼんやりと「大学」としか進路の選択肢を知らなかったです。僕の出身校は自称進学校だったし。料理とか好んで行く人もいないし。何となくで(大学進学を)選びました。

高校からの延長線として、大学の存在を認識していたことが伺える。ただし、学生 B の場合は、幼少期における関心事がきっかけとなり、学問探究に対する明確な動機付けが存在していた。

現役の時、物理の学部を受けていました。理由は、小さいころから宇宙関係が好きだったからなんです。中学の時は単純に宇宙が好きで。でも、高校の段階でロケットとかの開発は自分には向いてないなと感じて。それで、宇宙物理に関心が動きました。それから、大学では物理学部(学科)に入ろうと決めて大学選びをしていました。もともと関東の大学に行きたいという希望があって、その範囲の中で大学を検討していたら、B 大学への進学を考えるようになりました。そして、高校の頃のオープンキャンパスに行ったときに、この大学だ、とピンとききました。正直に言ってしまうと、環境が良ければどの大学でもよいと考えていました。校風を僕は重要視していたのですかね。

学生 C の場合、周囲の影響よりも、個人の学問関心による影響が大きいと語る。

免疫の研究を将来研究者としてやっていきたい

っていうのが高校の頃からあったから、それで、免疫の研究は医学か生物(が対象)なんですけど、(医学は)初期研修とかで30歳とかからしか研究できないから、生物として最初から研究者になるために選んだという感じなので、一応ちゃんとした目的をもって(大学進学を)選んだと思います。研究者になるためには絶対に博士までいかなきゃいけないわけだし。

そして、大学選択の際は、自身の関心のある学問分野に基づいて大学を検討していた。

学生Dは、大学進学への興味を抱いたきっかけは自身の学問関心であったが、進学を決定させたのは他の理由があると語る。

もともとはロボットに興味があったから、その点でいうと小さいころからやりたかったことをやるために大学に進学しようと考えました。まず、高専に進むという選択肢を知らなかったんです。だから、高校に入った時はロボット工学の大学に進むんだろうなと考えていました。鳥人間コンテストに出たかったから。それで1年生の段階からどの大学に行きたいかは少し考えていました。でも、結局世界史専攻で文系になったんですけど、それは先生が面白いから世界史っていう文系志望に変わったんです。それで(大学の進路を)決めなければならないとなった時を考えると、多分周りが(大学に)行っているから、自分も行っているというのに近いと思います。高校にいった時点で、もう大学まで行くんだろうなあと思っていました。

高校進学後は世界史の教師の影響を受け、異なる学問分野に関心を抱いた。

文系に進むことが決まった時は、世界史の影響が大きかったので、考古学が学べる学校に行きたいと思っていました。だから、将来の夢でいうんだ

ったら、教授とかになって研究するのもいいかなって。

しかし、受験期になると、さらなる志望校の変更の機会が訪れる。

先生に「金にならないぞ」っていわれて。変な話ですけど。世界史の先生が最後まで俺の担任で。それで「たぶんそういうの(研究職)に向いてない。会社の社長になりなよ。」って言われたんですよ。それで、法学部に行っておきなさいと言われてきました。法学部だと(就職の)幅が広いからですよ。変な話、あんまり大学はどこがいいってこだわっていませんでした。というのも、多分レベルの高い大学に行っても低い大学に行っても、結局習う内容は一緒だから。自分のやる気次第ですから。出願はみんなが知っている大学からレベルをそろえて行って、受けていきました

学生Eは、周りの影響も大きいですが、自身の学問関心もきっかけであると語る。

小学生の頃から(大学に行くことを)考えていましたね。両親の影響があつて。あとは、確かにうちの高校は大学にほとんどの人が行っていたので、周りの影響があるとは思うのですが、何を極めたかったかというのは一応あつて。高校時代に植物の研究をやっていて、それがきっかけで農学部に入りたいと決めていました。研究を体験してみようという企画があつて。多種の植物を同時に植えたらどのような相互作用が生まれるかという研究ですね。

親の影響により大学進学を当然視するようになったようである。学生Eにとって親の存在は大きく、進路選択にも影響を与えた。

中学3年の頃までは、両親に薬学部を進められていたんですけど。少し違うなと考え始めて。高校

1年の頃に考え直しました。両親から言われたことをそのまま受け取っていたので、そろそろ自分で考えてみようと思いました。

学生 F は、自身の興味のある学問が明確でなく、大学進学は周りの影響であったと話した。

ほぼ周りの影響ですね。ただ単に（入試を）受けて、大学に行くかという感じでした。高校に入ったところに大学進学を意識しはじめました。自分の友達はほぼ大学に行っていたから、その影響もあると思いますね。

現在法学部に通う学生 F あるが、学部選びのきっかけとなったのが高校の授業であった。

学問に関してあまりこだわりはあるわけではなかったですけど。いま政治学科にいるんですけど、政治に興味があったというのがあって。高校の授業で政治経済があったと思うんですけど、政治経済が楽しくて、高校3年間担任が授業をしてくれていたの、なんとなく政治経済学部とかを見ていたかなと思います。

以上のように、大学進学については、周りの影響はすべての対象者が受けていたが、対象者によって、どの程度学問関心による動機づけが生じていたかの点で違いが生まれた。

学問に対しての明確な目的意識を持ちながら大学の進路を決定していたのが学生 B・学生 C・学生 E であり、その他の動機づけにより決定していたのが学生 A・学生 D・学生 F であった。

4.2.進学先決定時の不本意感について

本テーマを調査することにより、対象者がどのように不本意感を抱いたのかを明らかにする。インタビューでは、進学先の大学はどの程度志望していたのかを尋ねた。第一志望であると答えた対象者には、志望順

位決定以前には、他に志望する大学は存在していたかどうかを尋ねた。最後に、進学先大学において、どのようなことを実現しようと志していたかを聞き出した。

学生 A は、進学先に大学が第一志望ではなく、志望度が高い他の大学が存在していたと語る。学生 A の場合、1年間の浪人期を経て大学へと進学しており、再度の受験を避けるため、合格した大学の中から選択した。

他に行きたい大学はありましたよ。でも僕は浪人をしているし。もう合格した大学の中から決めました。なので、不本意といえば不本意でした。

この場合、第一志望の大学へと合格することが叶わなかったため、不本意感を抱いていたと判断できる。

学生 B の場合は、現在通う大学は第一志望の大学であった。学生 B は浪人を経験しているが、現役時の受験とは異なる学部を受験していた。以下、学部変更についての発言である。

現役時代は本当に勉強していなかったです。浪人期になって、やっと大学をどこにしようか真剣に考えはじめました。学部云々よりも大学のネームバリューとか、名前だけで行きたいとかは無かったです。正直どこの大学だって良かったから。オープンキャンパスに行ったらこの大学が良いって感じたから。B 大学でいいかな、と考えました。学部の変更については、(高校)2年と3年で担任だった先生が物理の先生で、三者面談の時に、「物理学部に行くとな就職先がないよ」といわれたことをふと思い出して。物理をやっていると将来性が無いかもしれないって考えました。それで、別の興味を考えたときに、就職先がたくさんありそうな VR 関係を学ぼうと考えました。もともと好きだったし。それを踏まえて VR 関係が強い大学を探しても、やっぱり B 大学がいいという結果になりましたね。せっかく浪人して偏差値下げるのも嫌

だし。現役の時にいっぱい(入試に)落ちたわけだから、いきなり浪人になって上の大学を目指そうなんて考えませんでした。相変わらずB大学へのあこがれがあったから、決めました。

かねてより志望していた学部ではなく、将来性のある他の学部への進学を決定した。このことが、若干の不本意感を生んだと語った。

学生Cは、第一志望の大学が関西の大学であったため、志望順位の面で不本意感を抱いていた。

さすがに進路が決まった瞬間は(不本意感が)ありました。私は、自分の研究者になるための道筋としてどの大学が良いかを考えていて。免疫が強いのは関西なので、日本としては。そっちの研究科がある大学の生物(学科)に入るのが第一希望でした。でも、その大学は前期で落ちて、後期は今の大学にしたんですけど。それは、学部時代から研究室で研究できるプログラムが多かったから、免疫を早く研究できると思って志望した感じでした。きっかけは、友達がB大学を受けていて。そこで大学について知りました。あとは、詳しくネットとかで調べていきました。

学生Dは高校の担任との面談により、法学部に絞って受験した。結果は、第一志望の大学へと合格することは叶わなかったようである。

不本意感がありました。それでいまだに親ともめていますし。自分は浪人してもっと上の大学に行きたかったんですけど、親はつぶれている俺を見て「お前はもう一年浪人を頑張れないって」言われました。実は浪人したかったんですよ。まあ過ぎたことだから仕方ないんですけどね。

学生Eの場合、植物の研究をしたいという目標の下、志望校選択をしていた。しかし、実際に入学したのは、異なる学部の大学であった。

今の大学は農学部ではなくて。私今理学部に入っていて。この大学はオープンキャンパスすら行ってなくて。何なら受けることが決まったのが高校3年生の12月だったんですよ。農学部を検討していたら、私の実力周辺の大学がなくて。上か下しかなかったんですよ。それで、当時通っていた予備校の先生にここ受けてはどうかといわれました。

そのため、不本意感を長い期間抱いていたという。その不本意感は、友人たちと関わる中で生まれていた。

すごく不本意感がありました。正直、大学2年や3年の頃まで引きずっていました。あの、一応高校の仲良かったメンバーがそろいそろって高学歴で。この中に自分の大学が入るのがいやで。今は吹っ切れているのでいいんですけどね。

学生Fの場合は、最終的に第一志望の大学への合格を果たした。

受験は幅広い学部を受けていました。高校の8月で偏差値が30くらいしかなくて。野球をずっとやっていたというのもあるんですけど。一夜漬けでテストとかも受けていたから。そこで志望校を検討していったときに、うちの大学の指定校推薦で一番高い大学を受けようかと決めました。あとは乱れ打った感じです。大学の偏差値を見ながらですかね。

しかしながら、合格した大学に対しては不本意感が存在していたと語る。

高2とか早い段階で勉強とかをしていればよかったなという気持ちがあります。できるだけ偏差値が高い大学に進みたいという希望があったので。

以上をまとめると、学生 A・学生 C・学生 D・学生 E は第一志望の大学へと合格することが叶わなかったことによる不本意感を抱いていた。学生 B と学生 F は第一志望の大学へと入学することは実現したが、学生 B は学部に対しての不本意感、学生 F は早期に受験対策を行わなかったことへの不本意感を抱いていた。

4.3.大学入学後について

入学した大学において、入学以前に抱いていた、目的を実現する環境は整っていたか、入学前と後の違いなど調査した。

学生 A の場合、公務員に就職したいという目標が存在しており、それを実現するための環境に対し、良い印象を抱いたようである。

公務員の学習支援が 2 年の頃から受けられて、そこが良かったと思いました。それは、大学に入ってから気づいたので、いい意味で入学前とのイメージが異なりました。

実際、学生 A は 3 年次に公務員対策の学習支援を受け、試験合格に向けての勉強に励んだようである。また、大学では政治学を専攻しており、高校時代との学びの違いについて以下のように語る。

授業も思っていたより退屈でなかったです。高校の時とは違って、自分で学びたいことを学べることはよかったです。

学生 B の場合は、自身がかねてより志望していた学部とは異なる学部に進学したが、その学部においても目的意識を得ているようだった。

最初に思い描くような、学問に対する理想像はあまりありませんでした。何となく VR がやりたいな、と考えていただけで。学問であれば、数学であれ、物理であれ、なんでもよいと考えていました。僕は新しいことを知るのが勉強であると思っていて、その環境が整っていれば、どこの学部で

もよいと考えるようになりました。

かねてより関西の大学への進学を志していた学生 C でも、現在の大学に対して良い印象をもっているようである。

学部生での研究プログラムがこんなにあるとは思ってなくて。卒業単位になったりとか、研究発表会とかちゃんとしていたりとか、いろいろな経験をさせてもらえるっていうプログラムだったことは、(大学に入学してから) ちゃんと知りました。あとは、立地が思ったより良かったです。東京に近いっていうのが (志望校選択) 当時は特になんとも思っていなかったんですけど、意外と東京の研究所のシンポジウムとかに行きやすくて。

学生 D は、入学前に思い描いていた、自由な大学生活からの違いを語った。

ある程度自由が無かったと思いました。(入学前は) 好きな授業を好きなだけ取って卒業するものだと思っていたんですけど、必修選択とかで、意外と一週間の中で自分の自由は狭まっていくんだなと感じました。高校の先生に「社長やりなよ」といわれたことがきっかけで、会社法とかを履修しましたね。

学生 E は自身の関心のある学問とは異なる学部に入學した。しかし、次第に学歴に起因する不本意感は低減したと語る。

自分の学部は臨床検査技師課程というものがあって。そこに入って職を手に入られればなんか学歴なんか関係ないのかなと思うようになって。

学生 F は、大学の雰囲気の良いことや幅広い科目の履修を通して、不本意感を低減させていった。

田舎が好きなので。なんかのんびりできる感じがよかったです。あとは、法学部にはまじめな人が多いので。居やすかった点が良かったですね。あとは、1・2年で幅広い授業を受けられたことがよくて。メディアとか美術とか受けられたので。2年生から自分の専攻を選んでいくというのは、何かやりたいっていうのは大学に入った時はなかったもので、それは自分に合っていたのかと思います。不本意感はなくなったと思います。

以上をまとめると、不本意感を抱いた原因は多様であるものの、入学後には、進学先の大学に対して、制度面や環境面で良いイメージを抱いていることが伺える。

4.4.大学生活全体を通して

大学生活において、対象者が満足感を得ていた（目的意識を持ちながら活動していた）要素はいかなるものであったのかを尋ねた。要素としては、学部の授業、他の学部の授業、ゼミでの活動などの学問面に加え、サークル活動、アルバイト、就職活動なども含める。

学生Aに関しては、就職活動が大きな要素であったと語る。

僕が一番目的意識を持ちながら取り組んだのは就職活動です。他とは違って、ゴールが明確である点は、自分にとってとても大きかったです。

就職を見据えての大学選択を行った学生Aにとっては、就職活動に対して目的意識を抱くことは容易に想像できる。ただし、不本意感の低減に関しては、公務員試験合格に向けた個人での取り組みに加え、大学生活を通した「人付き合い」が大きく影響したと語る。

進路が決まった時はやっぱり不本意感があったけど、入ったらそこでいろいろあるし、あまり気にならなくなったかなと思います。人付き合いが一番大きいです。サークルもそうだし、僕の大学は1年からゼミの授業があって、そこで親しい人

ができたし、あとはアルバイトもやったりして。そこでも交友関係がありました。結局、大学受験が終わって、他のことをたくさんやるようになったから、そこで（自身が進んだ大学の）進路の事とかをあんま考えなくなったと思います。

学生Bに関しては、学問面において目的意識を持ちながら大学生活を送っていたようである。

研究室で論文を読むことが一番充実しています。あとは、留学生が多いという校風も利用して。今日本にいながら留学しているかのような環境があるし自分にとってはいい環境です。反対に、サークル活動をしているときに、「大学生活をしている」という感覚はあまり沸きませんでしたね。サークルの規模が大きくなかったからかもしれないですけども。

学部自体に大きなこだわりが存在しない学生Bにとっては、いかなる学部であっても、新たな知識を積極的に吸収しようと取り組む姿勢が、不本意感の低減につながったようである。

学生Cの場合も、学問面での目的意識の獲得が大きいと語る。

充実感の大半は研究室での生活ですよ。あとは、生物の専門知識を得るという学問のところにも比重はある程度あるかな。まあ、あとはサークルもそれなりに（充実感が）あったかなと思います。

さらに、第一志望の大学へと入学することが叶わなかったことに起因する、不本意感も解消された。

不本意感は100パーセント解消されました。やっぱりちゃんと研究者としての将来像とかもだし、研究や実験一つひとつも色々教えてもらったので、それが実現できたのもB大学に行ったからこそでしたし、先生の数が多いからわからないですけど、いろいろと（対応が）丁寧なんですよ。

他の大学の知り合いだと何となく大学生生活を過ごしている人が多いから、私はよかったなと思いますね。不本意という面では解消された人です。

学生 D は、仲間との関係性に充実感を感じ、不本意感を低減させた。

充実感を得ていたのは、ゼミとかサークルとかの対人関係かなと思いますね。人脈なのかな。先輩との関わりの中から視野が広がるし。何のために大学に入ったかというのがばらばらだし。それだからやっぱり自分の（考えの）幅が広がりましたね。部活動とかもそうですけど、たまたま思想が強い人たちが集まったので。いい意味で幅が広い考え方が得られた点で充実感があったと思いますね。大学は勉学をする機関であることは確かにそうだけれど、いろんな人と交友関係をもつのもいいことですよ。

学生 E は、学問の探求に対して目的意識を抱いた。

やっぱり学問面ですかね。最初の方で植物とかを学ぶことができましたし。途中から医療について学べたのも、親が医療従事者なので、話のネタになって楽しかったりしました。研究室もとても楽しかったです。もちろんサークルとかも楽しかったです。「星を見る会」というサークルに入っていました。

学生 F は、結果が形となって表れる就職活動に充実感を得ていたと振り返る。

目的を持っていたのは、就職活動ですかね。3年の夏から就職活動をしていたんですけど、就活は結局大学生生活を振り返るといふか。やってきたを言うっていうのが評価の対象になるので。アルバイトとか、ゼミとか、サークルとか。それをしっかり評価してもらって結果として返ってきたのはよかったと思います。

以上より、不本意感を低減させる目的意識として、「研究活動」などの学問面によるものだけでなく、「就職活動」「人付き合い」など、学問面以外の要素に起因する可能性がある事が明らかになった。

5. おわりに

5.1. インタビュー結果のまとめ

はじめに、インタビュー調査を基に、対象者の目的意識の獲得過程を振り返る。

進路選択時において、学問への目的意識が強かったのは、学生 B・学生 C・学生 E である。

学生 B の場合は、大学進学は当たり前のことであると考えていた。しかし、幼少期から宇宙への関心を持っており、学問探究という内発的動機付けによる影響も大きかったと考えられる。しかし、将来のキャリアを考えた結果、かねてより志望していた物理学ではなく、他の学部へと進学した。この点において、若干の不本意感を抱いていた。しかしながら、学生 B は元来新たな知識を身につけることに充実感を得ており、その対象は進学先の学部の内容に限ったことではなかった。ゆえに、志望していた学部でなくても高い興味を持って学問に励むことができた。学生 B にとって、大学とは学問を探求する場であり、サークル活動などの課外活動ではなく、論文を講読することや研究することに目的意識を獲得し、不本意感の低減の主たるものとなった。

学生 C の場合、大学に関心を持ったきっかけは、かねてより関心のあった免疫の学問分野であった。そして、目標とする研究が可能である大学を志望校としていた。第一志望が関西の大学であったが、受験の結果、関東の国立大学への進学が決定した。第一志望の大学へと合格することができず、その点に不本意感を抱いていた。しかし、大学生生活を送るにつれ、早期に研究活動に取り組むことができる点、教員からの手厚いサポートを受けられる点など、現在通う大学が持つ強みを感じるようになった。自身の関心のある学問分野を専攻することも実現し、研究活動に充実感を得ながら、

不本意感を低減させていった。

学生 E は、両親の影響により、大学進学は当然のものとして位置づけられていた。しかし、高校の研究授業で植物について学び、それがきっかけで農学部に進みたいという明確な目標が生まれた。しかしながら、農学を学ぶことのできる大学は限られており、その他の選択肢として、予備校の教師から医療系の大学を紹介され、入学を決定させた。進学先の大学は第一志望では無く、その点に不本意感は抱いていたが、一番の要因は、周りの友人が高学歴であり、自分自身に引け目を感じてしまうことであった。しかし、大学生活を送る中で、臨床の職業へのあこがれが生まれ、学歴に対する意識が薄まっていった。そして、研究活動への目的意識を持つことにより、不本意感を低減させた。

一方で、大学への進路選択において、他者や、就職を見据えての影響が大きいと語ったのは学生 A・学生 D・学生 F である。

学生 A の場合、大学進学は周囲の影響が大きく、自分自身大学で何をやりたいかを明確に定めていなかった。そのため、志望校選択の際は、将来の夢である公務員の合格実績の高い大学を検討していた。大学入試の結果、志望度が高い大学への合格が叶わず、はじめは不本意感を抱いていた。しかし、公務員支援の手厚さなどがきっかけとなり、就職活動を通じて目的意識を獲得していった。さらに、不本意感を低減させた最も大きな要因は「人付き合い」であった。同じ環境とともに時間を過ごす仲間の存在により、自然と自身が抱いていた不本意感は低減していった。

学生 D の場合は、ロボット工学への関心があり、それがきっかけで大学の存在を意識するようになった。しかし、高校の授業を受ける中で世界史の授業に関心を抱くようになったため、工学への関心は薄まった。それ以降は、周りの大学進学の流れに合わせて進学を決定させた。志望校を検討する際、将来的なキャリアに関するアドバイスを担任から受け、関心のなかった法学部への受験を決定させた。志望校に関してもさらに偏差値が上位の大学に行くことに対してのあこがれが存在し、不本意感を抱いた。大学では、自身の将来に関係する授業の履修を行っていた。大学生活全体

では、ゼミやサークルでの人間関係の充実が目的意識として大きかったと語る。同じ環境で多様な仲間と交流を深めることによって、自然と不本意感は低減していった。

学生 F の場合は、大学に対する目的意識を持つことなく、周りの進学に合わせて大学進学を決定させた。現在法学部に所属する学生 F であるが、高校の頃に受けた政治経済の授業がきっかけで政治学に関心を持つようになった。受験直前期まで野球部の活動が続き、思うような学習時間を確保することが叶わなかった。結果的に第一志望の私立大学への合格を実現させたが、早期に受験対策を行わなかった点に対し、不本意感を抱いていた。大学入学後は勉学に励み、自身の学部以外の学部の授業も積極的に履修した。そして、大学 3 年の夏から就職活動を始めたが、自身の努力を評価され、それが結果に繋がることに充実感を感じ、最も目的意識を持って行ったと語った。最終的に希望する就職先が内定し、不本意感が改善された。

表 2 インタビュー結果まとめ

学生	大学入学前における学問への目的意識は明確か	大学入学後の目的意識
A	明確でない	就職活動・人付き合い
B	明確	研究活動
C	明確	研究活動
D	明確でない	人付き合い
E	明確	研究活動
F	明確でない	就職活動

筆者作成

5.2. 考察

上記のインタビュー結果から、不本意感の解消過程は、大学入学以前での学問面への目的意識の程度により異なることが考察される。また、それにより不本意入学の要因も大別することができる。初めに、大学入学以前において学問に関する関心が高い場合である。この場合、希望する大学や学部に進学することができずに不本意感を抱く。しかしながら、学問自体に対する目的意識は根底に持ち続けている。ゆえに、研究活動などの学問面において関心を持つことにより、

入試によって生まれた不本意感を低減させる傾向がある。

次に、大学入学以前において、学問面において明確な目的を絞り込んでいない場合である。これは、先述したトロウの「不本意入学」に関連する。その場合、偏差値の低い大学へと入学することに対して、不本意感を抱く。しかしながら、同じコミュニティに属する仲間との生活や、就職活動などに目的意識を抱き、自然と不本意感を低減させていた。

上記の点より、大学生活のどの要素に目的意識を獲得し、不本意感を低減させるかは学生により多様である。つまり、大学側にとって、学問面のみならず、様々な角度から機会を提供することが重要であると考えられる。

さらに、不本意感の解消において、「大学生活を送るにつれ、学歴による不本意感は感じなくなった」という旨の発言をしたのが、学生A・学生D・学生Eであった。大学生活においては、自身が通う大学のコミュニティの中で、他の学生と交流する機会がほとんどである。偏差値によって序列化された大学入試を終え、同じ大学への入学を決断した他者との交流により、新たな目的意識を見つけ、不本意感の低減を自然と生んだ。「学歴」を感じさせない環境を提供することは、学生の目的意識の獲得を促す重要な要素として機能するのではないか。そのためにも、偏差値に左右されない、大学が持つ独自性や強みを、学生に発信することも重要ではないか。

学生がどのような点に不本意感を抱いているかは学生によって多様である。本稿では、インタビュー調査を行うにあたり、不本意入学の定義を拡大して捉えた。その結果、第一志望不合格による不本意にとどまらず、親の影響による不本意など、多様な背景を持つ学生の存在が認識された。ゆえに、「不本意入学者」を志望順位によって定義づけることは難しいのではないかと改めて主張したい。多くの学生に対して大学進学への門が開かれている現在、大学生活に対する目的意識が明確でないまま、周囲の影響によって進学を決定させる学生は少なくないと思われる。大学側は、第一志望者の増加に焦点を当てるだけでは不十分であ

る。これらの人々に対し、大学生生活の幅広い要素において、自らの目標を見出せるための環境づくりを整備していくことが重要ではないか。

5.3.今後の課題

最後に、本研究の課題について、三点述べる。

一点目に挙げられるのは、不本意入学の多様性についてである。「不本意入学」と一括りに述べても、第一志望に合格できなかったことがきっかけである学生も存在すれば、地理的・金銭的条件などの要因が存在する学生も存在する。本研究では、不本意入学を広く定義し、インタビュー対象者を設定した。今後、どのような背景を持って大学へと進学したのかを詳細に追うことも重要ではないかと考える。

二点目は、調査の対象人数についてである。本稿では6人の協力者へのインタビュー調査を行い、大きく2つのタイプがあると考察した。しかし、より多くの対象者に範囲を広げた場合、上記の考察がすべての学生に当てはまるとは限らない。不本意感を抱いた背景に焦点を当てるとともに、より多くの学生に対して調査を行っていくことが必要である。

三点目は、インタビュー対象についてである。本稿では、大学入学後に不本意感を低減させた学生の過程を追うことにより、望ましい支援の在り方への示唆を試みた。しかし、不本意感を低減させた学生だけを対象とすることは、不十分であると考えられる。大学入学時に抱いた不本意感を、大学入学後も抱き続けている学生も対象とすることにより、より多角的に現状を明らかにすることができるのではないか。

<参考文献>

- 雨森聡, 2006, 「不本意入学の学修への影響—これまでの不本意入学は本当に不本意なのか—」『大学入試研究ジャーナル』, pp.111-116.
- 伊藤美奈子, 1995, 「不本意就学類型化の試みとその特徴についての検討」, 『青年心理学研究』7, pp.30-41.
- 大隅香苗・小塩真司・小倉正義・渡邊賢二・大崎園生・平石賢二, 2013, 「大学新入生の大学適応に及ぼす影響要因の検討—第一志望か否か、合格可能性、仲間

- 志向に注目して—』『青年心理学研究』, 24, 2, pp.125-136.
- 神林博史, 2014, 「本学における不本意入学者の特徴: 東北学院大学新入生意識調査に分析」, 『東北学院大学教育研究所報告集』 14, pp.15-25.
- 小林哲郎, 2000, 「大学・学部への満足感 学歴・転学部・編入・再受験」 小林哲郎・高石恭子・杉原保史(編)『大学生がカウンセリングを求めるとき』, ミネルヴァ書房, 4章, pp.61-67.
- 竹内正興・定金浩一, 2020, 「現代の大学入学者—入学と就学の観点からの検討—」, 『甲南大学教職教育センター年報・研究報告書 2019年度』, pp.1-11.
- 竹内正興, 2016, 「進学校出身の大学不本意入学者に関する研究—大学志望度と評定に着目して—」, 『佛教大学大学院紀要・教育学研究科篇』, 44, pp.19-33,
- 竹内正興, 2014, 「大学入試構造と不本意入学者のアイデンティティ—AO入試は不本意入学者を減少させる施策となりえるのか—」, 『佛教大学大学院紀要・教育学研究科篇』, 44, pp.38-51.
- 竹内正興, 2022, 『不本意入学になる人とならない人の分岐点 第一志望でなければ不本意なのか』, 広島大学出版会.
- 竹内洋, 1988, 『選抜社会—試験・昇進をめぐる〈加熱〉と〈冷却〉』, リクルート出版
- 鶴田一郎, 2016, 「不本意入学した女子学生の事例」, 『広島国際大学教職教室教育論叢』, 8, pp.33-41.
- 中村高康, 2012, 「大学入学者選抜制度改革と社会の変容」, 日本教育学会 『教育学研究』, 79, 2, pp.52-61.
- 浜島幸司・谷田川ルミ・武内清, 2013, 「大学生活充実度の時点別分析—「学生生活実態調査」(全国大学生生活協同組合連合会)を用いて—」, 『日本教社会学学会大会発表要旨集録』, pp.322-325.
- マーチン・トロウ, 1976, (著)・天野郁夫・喜多村和之(翻訳)『高学歴社会の大学—エリートからマスへ』, 東京大学出版会.
- 文部科学省, 2022, 「学生就業状況(中退者・休学者等)に関する調査(令和3年度版)」
- 望月由起, 2007, 「高校生の『入学校選択』に対する他者の影響」, 『キャリアデザイン研究』, 3, pp.140.
- 山田剛史, 2009, 「大学志望度と満足度」, 『大学生の学習・生活実態調査報告書 2009年3月』, Benesse 教育研究開発センター, 第2章(1), pp.42-43.
- 山田ゆかり, 2006, 「大学新入生における適応感の検討」, 『名古屋文理大学紀要』, 6, 29-36.
- リクルート進学総研, 2022, 「高校生の進路選択に関する調査(進研センサス)」.